特集テーマ「改元」

漢の武帝と元号

粟　光行

漢の孝武帝（武帝）の時代に初めて元号（年号）が用いられた。

それ以前、年号は無く、君主が即位してからの年数で表した。例えば「史記」の「秦本紀」では襄公の元年、或いは、寧公の2年と表現している。武帝が即位したBC140年は、その当時は今上皇帝の元年、孝武皇帝元年と呼ばれていたのだろう。

日本では天皇名を呼ぶ時、崩御後に生前の功績をたたえ贈られた諡号（シゴウ　諡名）を使用し、在位期間中は今上天皇、またはお上と呼んでいるが、古代中国では生前の字（アザナ）を用いていたようだ。「史記」でも武帝は即位後すぐに孝武皇帝と記している。しかし、「史記」は武帝の即位の翌年BC140年を『建元（ケンゲン）元年』としている。BC116年、汾陰（フンインもと魏の国）で鼎（カナエ3本脚と2つの耳状の把手の付いた器で帝位・王位の象徴）が出土した。その鼎の大きさは普通の鼎とは異なり、模様は彫ってあったが銘文は刻んでいなかった。鼎を携えて中山（陝西省）に着いた時、快晴だった空は、にわかに黄色の雲が蓋い、鹿が前を横切った。天子は自らこれを射止め、鼎を天にすすめる祀りでこの鹿を生贄とした。宝鼎（ホウテイ）が出土した年を『元鼎（ゲンテイ）元年』とした。これが最初の元号です。武帝はBC110年、武帝は泰山で封禅を行なった。封禅とは聖天子だけに許される天地を祀る儀式です。泰山から帰還すると、有司が「宝鼎が出た年を『元鼎』といたしました。今年は封禅にちなんで『元封（ゲンポウ）元年』と致しましょう」といった。武帝は封禅にちなみ『元鼎』を『元封』に改元した。『元封元年』が改元の始まりです。古代中国では王者が革命を起こし天命を受けて新しい王朝を立てたとき、天体運行の法則の基を考え、天の意を受け、それに従い暦を改正し、天子の衣服の色を変える事が重要な事であった。太陽と月の運行によって暦を定めたが、太陽と月の運行には差がある。武帝の治世の前半まで、秦時代から100年以上も、10月1日を年の初め、元日とする「顓頊暦（センギョウレキ）」が使用されていた。しかし、日食等の天文現象とのズレが出ていた。1年365日の太陽の運行は季節の変化に遅れる事はないが、29・53日で満ち欠ける月は、29日と30日の月を交互に設定する事が必要となる。29日の少の月を6月、30日の大の月を6月交互に設定しても、1年は354日にしかならず11日の差が出来、3年で1月分の差となる。そこで19年間で7回の閏年を置いた。元封7（BC104）年の11月甲子朔旦（サクタン1日）が冬至であった。冬至の正午は太陽の高度が1年で最も低くなり、垂直に棒を立てれば影が最も長くなり観測が容易である。『元封7年11月1日』を『太初元（BC104）年1月1日』に改元し、「太初暦（タイショレキ）」を施行した。月の満ち欠けに生活が結びついていた古代の中国の人々は、こうして太陽と月の運行を暦に上手く取り入れた。ところで、この「太初暦」の作成に「史記」の作者、司馬遷は太史令として参画している。当時、天体の現象は地上の事件と関連があり、地上の世界に何か異変があれば、それは天体の異変として現れると考えられていた。その為、地上の事件を予測するために天体観測を行なっていた。「史記」の「天官書」には五星、歳星（サイセイ　木星）・蛍惑星（ケイワクセイ　火星）・太白星（タイワクセイ　金星）・辰星（シンセイ　水星）・鎮星（チンセイ　土星）の5惑星の複雑な動きによって地震・天候不順等の自然現象、地上世界の戦争・洪水・旱魃・飢餓等の災害を具体的に予測しようとした。司馬遷は天体現象の研究を通して「太初暦」作成に大きな影響を及ぼしたと思われる。さて、『建元元年』に話しを戻そう。史記」の「封禅書」の中に年号の初めを記した部分がある。「年号（元号）は天から下されるめでたいしるし

により名づけるのが良い。「1元」・「2元」と数えるのは良くない。いままでの「1元」は「元建」とし、「2元」は彗星が現れたので「元光」、「3元」は一本角の獣を捕らえたから「元狩」と致しましょう」と役人が言上したとある。実際の元号作成に当っては『元鼎』・『元封』もこの言上に従って、「元」の後にめでたい字、鼎で『元鼎』・封禅の封で『元封』とした。

この時『元鼎』から『建元』まで6年ごとに遡り『元』の字を付した『建元』・『元光(ゲンコウ)』・『元朔(ゲンサク)』・『元狩(ゲンシュ)』の4つの元号は追命といって後から名付けられた。

武帝は『太初』のあとも『天漢(テンカン)』・『太始(タイシ)』・『征和(セイワ)』と4年ごとに改元した。そして最後の『後元(コウゲン)』と11の元号を在位55年間に使用した。

以後、明代に1世1元制になるまで何か珍しい事があれば改元する1世複数元号制がとられた。

武帝の祖父孝文帝(文帝)は仁政の皇帝として後世の評判が高い。文帝の時代は元年から16年までは文帝の年数で表示さていたが、文帝16(BC164)年、38歳の時、瑞兆とも言うべき玉杯が発見された。その玉杯には「人主延寿(ジンシュエンジュ)」の文字が刻まれていた。文帝はめでたい玉杯が現れたのを記念し「来年から後元(コウゲン)と改元しよう」と言った。

元号らしい元号は武帝の時からであるが、文帝の「後元元年」が最初の元号のでは・・・・?

しかし、その後、この玉杯はいかさま占い師の新垣平(シンエンペイ)が作成し、文帝に献上した事が判明した。新垣平は皇帝を騙した罪で3族皆殺しの刑を受けたが、いまさら改元する事も出来ず、後元7(BC157)年文帝の死まで「後元」の元号を使い続けた。

元号は中国では以後歴代の王朝で使用され、漢字の普及に伴ない東アジアの国々でも使用された。

日本では皇極天皇の4(AD645)年を改め『大化元年』とした。

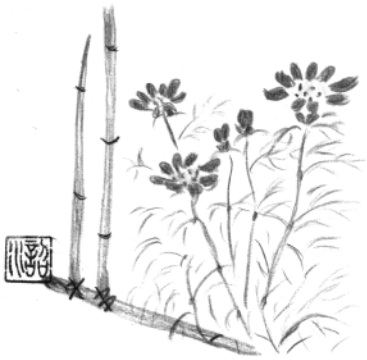
漢に遅れること780余年。日本やベトナム等は中国からの影響を受けながら一定の距離のもとに独立と統一を示すため、独自の元号を定めた。朝鮮半島では経済的な利益を求めて主に中国の元号をそのまま使用した。

朝鮮の李王朝は明治43(AD1910)年日本に併合されて終り、本家本元の中国でも辛亥革命による宣統(セントウAD1911)3年で幕を閉じた。

日本では天皇の代替わり(代始改元)や善政を賛美する(祥瑞改元)、地震・噴火等の災害・疫病などの天変地異による改元が行なわれた。

平成31(AD2019)年4月30日で天皇が退位して、翌日今上天皇の即位により令和元(AD2019)年5月1日に改元された。

明治以降では天皇の退位による改元は初めてのことです。中国やベトナムは革命により王朝は滅亡し、元号は使われなくなったので、今や日本の元号制度は世界ただ1つの存在となった。

令和元年5月吉日

中国古典文学大系12
「史記　上中下」　司馬遷著
野口定男・近藤光男・頼惟勤・
吉田光邦訳 平凡社
中国の歴史03　「ファストーエンペラーの遺産(秦漢帝国)」
鶴間和幸　講談社
朝日新聞
「平成31年4月1日夕刊(東アジアの元号)」を参考にしました。